佐伯の文学

増村隆也

目次

一、佐伯の文学
二、高政廉記　高定
三、文林随筆序
四、高慶の和歌
五、高慶の観桜
六、佐伯藩の儒者
七、扶揺公子の詩
八、扶揺公子と楓渓
九、城山上棟文　楓渓
十、高標と四教堂
十一、高標の詩
十二、雅　衍
十三、高標と森天素
十四、先哲の著書
十五、毛利家蔵書目録
十六、佐伯文庫後日物語
十七、小林九左ヱ門廟記　乾堂
十八、高誠の詩
十九、佐伯の高僧
二〇、中島子玉
二一、中島子玉の詩（その一）
二二、中島子玉の詩（その二）
二三、明石秋室の詩
二四、金刀比羅神社　奥井寛
二五、奥井春耕碑銘
二六、歌　人
二七、春鞆ノ歌
二八、俳　人
二九、長瀬原の碑
三〇、佐伯茶飲話序
三一、温故知新録序
三二、続温故知新録序
三三、秋月橋門の詩
三四、佐伯岡ノ谷の碑
三五、明治初年の学者
三六、城山還原の碑
三七、佐伯藩の研究資料
三八、鶴藩略史発行始末

一、佐伯の文学

佐伯の文学を説く者の多くは第一に高標を挙げ四教堂を説き、その祖父六代高慶のあつた事を知らない。高慶は初めて佐伯に入つた時沈然して云わず、密かに将士の為す所を見、三年後家老沼兵太夫の専横を攻めて之を国外に追放し、家老戸倉庸重に政事を一任して旧来の弊政を改めさせ、元禄十五年明石五郎太夫を江戸より聘して文学を掌らし、満江政右ェ門に兵学を掌らし、子弟の教育に当らした為に文武並び進むに至つた。又僧乾堂を挙げて養賢寺の住職とし仏教を盛んにし、橋佐古主計を挙げて五所明神の神官とし神仏を振興し、更に農事に留意し中根元胤に租税法を改めさせ、第三代、四代、五代に仕えて専横を極めた沼父子の悪政を一掃した中興の英主であつた。

高慶は宝永五年正月明石五郎太夫をして、読書初めに城中に大学を講義せしめ、自ら百官を率いて之に臨み、享保四年楠道順を経史に該通する故を以て、侍医とし諸士に講義せしめ、更に享保二十年養福寺匡山、長泉寺薫堂を城中に召して仏経を講義せしめた。之が為佐伯の文教は翕然として盛んになつた。佐伯の文学を口にするに当つては第一にこの英主、高慶を挙ぐべきである。後世佐伯の文学の盛んになり、高標の如き学者の出てたのも、一に高慶に起因する事を忘れてはならない。

二、高政廟記

曩祖従五位下、民部大輔藤原朝臣高政（后改伊勢守）氏尾州之産也、其性卓犖雄偉也、少而仕太閤秀吉公、天正十一年四月廿一日、於江州志津嶽秀吉公与柴田勝家一戦之時、逐敵挑戦自傷矣、其余毎臨軍無不得利也、同十五年賜之豊後州隈城及釈禄弐万斛、文禄年間朝鮮征伐之時、　従命為軍監在陣経年始還兵於肥州名古屋謁秀吉公、　公感賞其忠誠遣豊州日田玖珠二郡吏之也、再渉朝鮮間南原之城陥之、且於水宮之瀬先諸将与大明蕃船忿撃而自採才追討敵兵、振武威於異域、秀吉褒称勇猛厚賜感書数篇、慶長六辛巳年四月五日、因東照宮之命辞隈城而賜同州海部郡佐伯庄之城於鶴屋居之、慶長十九年冬、摂州大阪陣之時、

屬東照宮之命、於備前島京橋中計計策悉有功、翌年夏再有関東御出馬之告、而出帆於佐伯、五月五日到大坂拝謁東照宮台徳院殿、元和一統之後、世々仕将軍家也、寛永五戊辰年、一月十六日於武陽卒、春秋七十歳、号乾外紹元嗚呼大哉高余烈、次長輝子孫之後栄、我苟続箕裘景藁之不歇、於茲新造立廟、謹誌之。

寛永四年十一月拾六日

従五位下周防守毛利氏藤原臣高定

備考　高定は後の高慶である。

三、文林随筆序

元禄十四年四月六代高慶は、その著文林随筆に自ら次の序文を記した。

中山毛穎、弘陰陶泓、会稽楮生、此三子者、常侍左右事我者也、謬吾与若、玩文久矣、簡牘之中、茗話之間、詩賦文章暨倭歌雑体之属、毎有感心慰情者、則不問俚雅、不分古今、命彼二三子者、随即筆焉、且如我雑詠、亦漫筆焉、漸々積之、遂満帙矣、題曰文林随筆、雖瑣雑無補人、而足自慰雪朝月夕之寂寥、故不忍焚棄聊復存之云爾。

四、高慶の和歌

歳旦

初春を祝ふ心は九重の花の都も鄙も変らし

春色浮水

年々に変らぬ春の空の色を映すも幾世庭の池水

御陣笛に

袖濡す小夜の寝醒の初時雨同じ枕に聞く人もがな

郭公に寄せて懐旧す

年月の経りぬる世をも今更に啼く音に忍ぶ山郭公

御城内稲荷社宝前

稲荷山頼むを知らば願き事の行末守れ三つの玉垣

潮谷寺前立如来を納めた時明誉上人に贈る

われ内に作れる罪に沈む身を浮べん為の誓ひ頼もし

龍護寺観音宝前

われ救ふ誓をいとゞ願ふにも普ねき門の品を漏すな

五、高慶の観桜

六代高慶は享保十三年三月十一日長子高通、家老益田令治初め侍医等と共に桜見の宴を開いて次の和歌を詠んだ。

高慶　思ふぞよ今日のいとまにまどいして暮れ行く春の花の名残を

高通　わけて今日春の名残を惜むとて花見て暮らすあかぬ眺めに

令治　年毎に変らぬ今日の恵みには匂ひを残す春の影かな

侍医中川泰巷　山鳥の尾のへの桜咲きにけり霞をわけて匂ふ春風

奥井春耕　今日といへば花の名残もいとしほに尚惜しまるゝ庭の春風

岸田桃要　散る花の飽かぬ名残も言ひ知らぬ尾のへの庭に匂ふ春風

六、佐伯藩の儒者

佐伯藩の有名な儒者として次の六人がある。

(1) 明石五郎太夫。元禄十五年六代高慶に江戸より聘せられて佐伯に来り学風を盛んにし、佐伯の文学の濫觴は実にこの人にあつた。

(2) 松下夷。寛政六年八代高標に筑後より召されて儒官となり、四教堂の学制を改めた人で通称左ヱ門、字は世民、号を筑陰、西洋と云つた。

(3) 中島大賚、藩士中島秀親の子で通称増太、字は子玉、号を米萃、海棠窩主人、古香外史と云い、文政十年儒官となり天保五年三十四才で没した、山陽と交友あり詩人として天下に其の名を称せられた。

(4) 高妻友、藩士高妻佳太夫の二子で通称謙之進又は廉平、字は直、号を芳州と云つた。幼にして子玉に認められ弘化元年儒官となつたが、病多く水筑之龍を推挙した。

(5) 水筑之龍、延岡の人で通称小相、字は伯起、号を橘門と云い後に姓を秋月と改めた、弘化四年儒官となり明治元年葛県知事となつた。

(6) 明石粛、杵築の人で明石氏の養嗣となつた、通称大助、字は亀峯、号を青士と云い文久二年郡代兼町奉行を辞し博文強記を以て知られ逸話が多い。

(7) この他文政二年下野国黒羽藩に聘せられた堅田馬鎮神社の社掌戸坂出浦や楠道順、梶西典令、関谷儀、関谷長熙等の学者がいた。

七、扶揺公子の詩

備考　扶揺公子は高慶の第六子にあたる。

春夜江城聞笛

月満二江城一十万家　何来羌笛落梅花
春風吹起離人帳　曲裡思レ郷鬢欲レ萃

夏雨過二龍護寺一

河辺避レ暑問二霊蹤一　含レ雨祇林暮色濃
自似二青龍護二蕭寺一　老松用繞羽明峯

九月四日遊二龍鼎山寺一賦示二檀溪師一

祇樹霜飛寒色開　黄花新酔遠公杯
龍山未レ及レ登二高会一　已向二秋風一落レ帽来

詠二浅海瀑布一

飛狐山色彩雲辺　下有二層崖一瀑布懸
自是香爐千仞水　揮レ毫好作二謫仙篇一

登二蒲江瑠璃閣一

日出東光満二海流一　瑠璃宝閣映二潮頭一
医王若有二長生術一　何必裹レ裳到二十洲一

八、扶揺公子と檀溪

養賢寺住持檀溪は幼名徳三郎と云い、藩士高瀬宗賢の三子であつた。寛延二年七月鶴屋城落成に当り上棟文を記した学者であるが、扶揺公子と交友があり共に詩を賦し、後檀溪が松寿寺に移つた後も公子は老師を訪ねて共に詩を賦している。

九月四日遊龍鼎山寺賦示檀溪師

祇樹霜飛寒色開。
黄花新醉遠公杯
龍山未及登高会
已向秋風落帽来

訪檀溪老師於松寿寺老師有詩同賦贈

長江移棹問禅棲
十二峯峯暮色迷
帳望陽台他日雨
攜来好与恵休顕

九、城山上棟文　檀溪

豊国之南有佐伯、衆山競出、高而大者、曰鶴城、其地険也有味乎設険之義乎、粤惟、慶長壬寅歳、高祖毛利氏高政公、則所築也、寛永未、君尚幼、執事専力政、不遑於其修治、意以為渝備矣、数十年来延右耳、夫城不盛、則戎之生心、民慢其政、国之患也、先君高慶、公益嘗憂之、於是、老臣慮事、以授司徒、分財用、是餱糧、略基跡、半板幹、亨保丙午、夏五月、其役成、

楼櫓斯興、堞而門焉、一再築之後、数月暴風雨潦之改、而又中廢、爰嗣君従五位下藤原朝臣高丘公、在東都、而不愆、先君之遺命、使国老大夫慮事、遂以延享乙丑冬十一月、重修集寧如塗附、天之陰雨、亟潰亟瞑乎、実湯也、今茲寛永己巳夏、公奉命於覇主、往入其城郭褰帷、糺察美悪、力行教化、済世其美、以章功烈、乃以夷則壬子吉蠲落成、張宴具礼、大叛其甲君、及宗臣庶官、載考莫匪其極也、今庭中、武緯文経咸具、春秋高枕自愉快也、仍予奉官命、誌上梁文広其辞曰、 木兎州分、豊国山競、白鶴城大、佐伯地雄、天険誰人以可升地険王后之是設夫惟嫡孫毛利侯高丘、沐朝延沢、飾世家之勣、再興無窮之基、保護百堵、敢有阻山之冠、謹省外屏、匪除于庭、則道不愆、匪力於野、知時能勁、延石土堞、以堅以固、望楼堠櫓、幸盛幸隆、大夫量功、不備人、而百姓斯字、司徒慮事、不奸時、而大物是憑、諸侯有信、会盟、神雀感数集慶、勤撫辺疆飽、堯天楽、坐掃煙塵、回舜日耀、旌旗続百世、無昭明徳、九族序穆、煮塩於海、海若至為善富郷、采金於山、山霊来翊役饒府、善頌是傚、用助挙梁、抛梁東、即曇之饒指掌中、軍士春秋耀百堵、一麾払日若萃紅、抛梁西、務本和戎恩、籠低、父老不欺常慰、望彊場政平忘鼓鼙、抛梁南碧海明珠老蚌含、君子賢乎垂美教、流通商貨不曾貪、抛梁北、一築金台仍飽徳、千里驊騮尽致身、豈求屈産与垂棘、抛梁上、国中雄劍名于時、七星粲爛斗牛間、気徹於天除白瘴、抛梁下、丘陵有隆能誰跨、五雲長駐丁令威千歳帰来承徳化、伏願、上梁之後、時物順成、上下和睦、築作爰集、奕世而以弥堅、封爵爰登、継統而以避福。

十、高標と四教堂

高標は六代高慶の孫に当り、寛政の学者三大名の一人で、一代にして集めた八万本の佐伯文庫と共に余りにも有名である。高標は安永六年藩校を建て四教堂と名つけ、鋳造の年月不明であった古色皚然たる文宣王の像を総学監の床の間に置き、更に司馬温公の水甕を毀つ図（狩野由信の画）を掲げ児童の戒とし公は親しく次の如くその上に題した。

儀封張伯行養正類編司馬温公名光字君実為児時与群児在大水缸辺戯要一児偶然、跌在缸中幾溺死群児皆驚走、唯光従傍取一石将缸擊破水即盛流此児涌出幸得不死此時光方七歳、当児戯倉卒之際就能有此見識有此手段故後来為元祐宰相調停新法、成旋

乾転転坤之功信処謂天授非人力也、然光生年所学自不妄語始可知誠篤尤為初学要。

高標は天明元年五月城中に文庫を造り内外の書籍八万本を集め蔵したが、その中に道蔵経があり、本邦に唯一部しかない当代の珍稀とさる本であつた。これは初め寛永寺の宮が清国に注文し未だ長崎に到達せぬ内に宮は薨した、公は関谷儀を長崎に遣して之を購入したのであつた。松下夷を筑後から聘して四教堂の儒官としたのは寛政六年正月であつた。夷は四教堂の学制を改め大いに文学を盛んにした。

十一、高標の詩

感秋得一東之韻

橋顔短髪暮途窮。　疎雨孤燈耕舍中。
直北天涯送旅雁　正南床下棲陰蟲
残生方尽詩無味　老境心衰酒有功
五十三年真一夢　人情恰似画虚空

白苟薬

一瓣残月玉容凉　絶色妖妍暁露香
疑見瑤台清宴罷　天風吹墜白霓裳

江平秋万里　山静月三更
彷彿寒烟外　孤舟有二雁声一

江頭曉望

曉鐘平麥散棲鴉　春滿江南十万家
渡頭漁人猶未起　一痕残月在寒砂

哭森天素

春風梅将放。　奈何失此君。
自今江東稿謂臥龍梅　辛若為誰芬

十二、雅　衍

八代高標は寛政時代の学者三大名の一人として誉高く其の著述も多かつたが、脱稿したものは雅衍(ガエン)廿二巻のみであつた。九代高誠は之を中島子玉に浄写校訂させたが、子玉は其の部類編次を詳にする事が出来ず、唯原稿に従つて編輯するに止めた、これが為に雅衍は序文も目次もなく何れを第何巻とする訳に行かないが、其の内の三巻には雅衍九集巻一、羽族類考巻二、木属一と巻頭に記されている。雅衍は動物、植物、昆虫に関する著述で動物の一巻の項目には犀牛、狼、騾、独角獣、虎、羊、牛、狙、象、麋、猴、麈、驢、麋鹿、熊、馬、猪、豰、鹿、鼠、犬、猫があり、植物の部の一巻には水奔草、芭蕉、鉤吻、蓀、蘭、媚草、龍鬚草、牽牛花、繡球、虞美人草、茉莉、素馨、葵、芙蓉、長春、鶏冠の記述があり、昆虫の部の一巻には異蟬、蝗、蚊、蜜、螢、蜂、蝌斗、蝶、蝦蟆、蟻、蝻、雲師、雨師があり、二十二巻を通じて六百二十四項目に就て記載されている、その中には鴿部彙考、鶯部彙考、鸚鵡部彙考、白鷴部彙考、吐綬部彙考等の研究論文もある。雅衍九集巻一の鳳に其の記述内容を例に取つて見ると、

爾雅鷗風其雌皇郭註瑞応鳥鶏頭蛇頸鶴頷亀背魚尾五彩其高六尺許。

諭雅翼南恩州北甘山壁立千仞有瀑水飛下猿狖不能至鳳皇栄其上彼人呼為鳳皇山所食亦蟲魚遇大風雨或飄堕其雛小者猶如鶴而足差短南人截取其觜謂之鳳皇杯。

十三、高標と森天素

山際の土屋家に梅南森天素写と記した葡萄を画いた一幅の画がある、画風から云つても書風から云つても一見して森天素が日本人でない事が想像される実に秀逸なものである。伝うる所では森天素は高標が学問を好むの余り支那より召し抱えていた学者だと云う。高標は森天素に師事し漢学を極めあの難解の著書雅衍を著述したのであろう。森天素の死に当り高標は次の詩を賦して其の死を悼んでいる。

哭森天素

春風梅将放
奈何失此君
自今江東稿
龍梅
辛苦為誰芬

十四、先哲の著書

大友興矮記、栂牟礼実録、栂牟礼実録等は佐伯にも関係のあつた人々の著述と思われるが著者は明らかでない。佐伯藩の祕事を収録した佐伯古老物語、佐伯茶飲話も藩の処罰を恐れた為であろう著者は不明で後世になつて書き加えたものもある。次に掲げるの外著述の儘筐底深く蔵せられ刊行を見ずに消失したであろうと思わるものも少くない。

六代高慶　文林随筆

八代高標　雅衍二十二巻。
関谷長熙　温故知新録二十巻。続温故知新録四十五巻。
扶揺公子　壺丘
中島子玉　愛琴堂七巻。日本新楽府一巻。米萃遺稿
平山小文治。　鶴藩略史

十五、毛利家蔵書目録

現在毛利家の蔵書目録を見ると三千七百三十本、法帖九十五帖が書かれている。勿論これは高標の蒐集された八万本の一部で警露館の倉庫に蔵せられ門外不出で借覧は許されていない。其の目録の中には、献上書目、献書総目御蔵書目の三書があるが共に東京送附となつており、高翰が幕府に献上した書目を窺い知る事は出来ない。毛利家には六代高慶の著した文林随筆、八代高標の著した雅衍、関谷隼人の著した温故知新録、十一代高泰の書写した温故知新録其の他家老日記等があるが、其等は手記として取扱われた為かこの目録には載つていない。蔵書目録書籍には武英殿、裛珍版書、百川学海、温公通鑑、史綜、知不足齋叢書、石倉十二代詩選、歴代名臣奏議、文献通考、読文献通考、淵鑑類函、資治新書、尚書正解、性天真鏡、慈海慈、御虚階、楞厳略疎、楞厳経講録、楞厳経会解、楞厳経説、古禅師寓言録、禅真逸史、資治通鑑、読資治通鑑、金剛盤若波羅密経集解一帙、僧尼孽海、釈道精解、禅宗永嘉集、玄沙大師語録等を記し計三千七百三十本があり法帖には九十五帖がある。

十六、佐伯文庫後日物語

佐伯藩主八代高標の集めた書籍は八万本と云われ、珍稀な書も少くなく佐伯二万石の財政もこれが為に傾いた程であつたが十代高翰は其の内二千七百五十八本を文政七年幕府に献上し幕府は昌平、楓山両秘庫に蔵し、高翰には賞として馬鞍等を与え

た。佐伯藩の儒臣中島子玉が篠崎小竹に献書目録を示して、天下の奇と云われた佐伯文庫を幕府に献じた事を惜しんだ時、小竹は佐伯侯が代々必ずしも好書の人とは限らず、万一書籍を愛好する人でなかつた時は、切角の蔵書も虫の食うに任せ散逸して了うであろう。其よりも幕府に献じ専門の係が居て保管するならば、反つて長く保管され、佐伯侯の蔵しないのは長く蔵する所以であると話し子玉は其の旨を目録の巻末に記した。佐伯藩には其の後残りの約六万本が蔵せられていたが、廢藩置県の時大分県に引挙げられ、過般別府にて今上陛下の御覧に入れた植物学の蘭書は其の一部であつた。

佐伯に残つていたものは、明治時代市内の古本屋に多く見受けられたと云い、佐伯図書館にあつたものも多く散逸し、心なき輩は紙が上質だからとての襖下紙に張つたと古老は話している。これ等の結果から見れば小竹の言は将に至言であつたと云つてよい。幕府に献じたものは東京大学、上野図書館等に保管され、中村敬宇翁の如きは東京図書館の蔵書に佐伯文庫印のあるものが頗る多いのに驚き、高標公の学識は何程であつたか測り知るべからざるものがあると人に話したと云う。

十七、小林九左衛門廟の記

即光院心誉常照居士、姓小林、諱吉晴、識度寥廓、気宇倜儻、起従諸士、奉仕于防州刺史、君顕歴擁勢、一旦遽然、遺屯離塞、諭諱八年、落頽雖窮、丹衷不忘、狎蝶樵漁、飽諳黎庶疾苦、寤寐恒一、沈思機籌、慮寛万姓、大明無私、再蒙自便、宰割勧農、分析政事、一麾編応、百度偕起、撫育功成、蒼生悦服、権衡帰握、四年于此、嗚呼惜哉、股肱未殲、天奪其命、稠人皆謂如失恃怙、居士従登年至死、心恭敬不動尊、平昔嘱曰、於予歿後、安置霊廟、子孫奉之、然而其嫡師胤接武成功余烈、一依旧時、不墜先考遺緒、謹思某顧聘、応其遺嘱、修卵塔於郊邑西蓮寺、浄社封彊、要教、雲仍鎮仰、雲山蒼々、江水洋々、煦嫗之沢、惟悳惟香、

（養賢寺住持乾堂記）

十八、高誠の詩

寛洪公（九代高誠）は詩を善くし関谷長熙が文政三年五月続温故知新録四十五巻を著して献じた労を謝して、

補政常堪置座右　多年辛苦感成功
人情移類凡雲影　世態繁同判棘叢
子細分条論愚魯　丁寧解事発明聰
閲来深寛心胸朗　温故知新数部中

文化四年五月江戸よりの帰途、明石の浜の波高く数日滞在の上出帆し舵楼に小宴を開いて、

解纜五更発赤城　万里長風五雨軽
回頭已失昨宿処　唯見烟波百重生
潮満灘頭平如席　楼船安穏棹歌行
初日浴波金蛇動　波光山色放新晴
海濶蒲帆片影小　天明遠嶼望裡清
捲簾到処縦吟皆　笑対佳景句還成
驢膾満盤白勝玉　且酌美酒随意傾
柔櫓声中乱人語　此時初慰羈旅情

十九、佐伯の高僧

佐伯の高僧として乾堂、依教、廉州、真誉、鼎州等を挙げる事が出来る。乾堂は六代高慶の時仁田原の正定寺住持から抜擢されて養賢寺住持となつた人で其の高徳を以て知られ宝永四年乾堂が円覚経を講じた時は遠近の僧侶が多く集り藩はこれがため白銀百両米二十俵を寄進した程であつた。依教は弧貫と号し高標の時の大日寺の住持で文政五年擢でられて京都勝功徳院の

住持になり権僧正に任ぜられ天皇より御杯を賜き佐伯藩はこれがため年五石を香萃料として送つた人である廉州は切畑村洞明寺の住持で禅裡に通じ声名高く嘉永元年六月藩は域外衆寺の上とした高僧である。真誉は寛政時代の潮谷寺の住職で仏経に博く通じ関谷儀が其の敏に服した高僧である。尚享保二十年十一月城中に観音経を講じた浦代嶽福寺住持匡山と阿弥陀経を講じた津久見長泉寺董堂は共に学識高く、幕末に潮谷寺住持であつた光誉は帆足万里、僧五岳等と交友があり博学を以て知られ著書も多かつた。長州征伐の時征討総督尾張大納言の使者として単身長州に赴き平和裡に第一回の長州征伐を終らしめた殊勲者は養賢寺前住持鼎州であつた。これ等高僧には色々の逸話が残されているが或は時代を間違え乾堂が六代高慶の時代の人であるにもかかわらず、十一代高泰の時代の人とし、快僧鼎州を誤つて藩政に謀叛を懐いて大衆をそそのかした者として巷間伝えられているのは惜しい。

二〇、中　島　子　玉

文化十三年正月子玉は日田に行き広瀬淡窓の門に学んだ。その時子玉は十六才であつたが、淡窓は一見して之を異とし特別の待遇をした、子玉は人となり洒落でたかぶらず品行方正であつたが、或時同僚に誘われて夜共に酒を飲みに行きそれを日記に書き次の様に書いてあつた。余平生為す所未だ人に対して云うべからざるもの有らず唯この一事は先生に屑うと。後に淡窓は偶々この記事を見て非常に感歎したと云う。淡窓の門に居つたのは二年であつたが、偶々頼山陽が西遊して淡窓を訪れて来た淡窓は山陽に子玉を侍らしておいたが、山陽は人となり簡傲で子玉を子供扱にして一言も口をきかなかつた。淡窓が子玉に命じて詩文を作らせると山陽は之を読んで愕然として容姿を改めて「これは私の失敗であつた」と云い其後到る所で「予西遊により三絶を得たり、山水に耶馬溪を得、人才に中島子玉を得、青楼の廉価に長崎を得た」と。

二一、中島子玉の詩（その一）

呈山陽

男子居二此世一　所レ期在二雄挙一　所以賢達士　不レ願レ安二環堵一　世俗不レ読レ書
跋渉将何補　豈無二好風景一　対レ之無二一語一　矯矯頼先生　気岸凌二千古一
著レ史継二班馬一　賦レ詩睨二李杜一　已倦二五幾遊　更踏九州土　走レ馬到二赤馬一
揚帆人二瓊浦一　載二来椽大筆一　風雲任レ手取　能得二江山助一　新句比二瓊珇一
喩レ之如二明鏡一　万影自然聚　咳唾皆成レ文　何知労与レ苦　嗟我蜩鳩姿
低回守二故処一　豈図蓬艾中　忽接二雲容倡一　拙辞君莫レ嗤　足二以推二肺肝一

頼山陽が日田の広瀬淡窓を訪れた時、淡窓が其の席に侍した僅か十六才の子玉に命じて詩を作らせ、山陽は其の子玉の俊英に驚いたと云う詩がこの呈山陽の詩であると云う。

二二、中島子玉の詩（その二）

遺詩

高情自与二世人一違　我是南豊一布衣　三十六峰猶缺レ一　今朝天上化レ龍飛

題画絶句天帝

白頭漁老面レ流居　揚柳当レ門画不レ如　昨夜東風吹レ雨過　満溪春長水香魚

彦山上宮

鉄鎖攀来踏二絶嶺一　肥雲豊樹眼将レ穿　弧鴻飛尽青天外　認得阿蘇一点煙

彦嶽

飛狐聳処試三豪遊一。　夾レ道松杉白日幽。　谷暗嵩陰山鬼語。　林深樹杪嶺猿愁
遠帆忽入三雲中一尽。　遙嶼究如三天際浮レ　茅屋帰来心恍惚　夢魂猶掛瀑泉頭

二三、明石秋堂の詩

野遊

両々三三携レ酒行　幽花幾処笑相迎　似下為三遊人一鋪中錦席上　春風満地紫雲花
一盃自飲一盃酹　古家前頭倒三緑樽一　醉臥不レ知三春日波一　野菜如レ雪照三黄昏一

栂城

妖狐青塚前頭嘯　怪鵰黒松深裏棲　藤蘿束縛一翁仲　沙上蝕余幾葬藜
千年古墨雲旗出　半夜陰風鬼馬嘶　英魂叱咤衆魂起　挾得秋声作三鼓鼙一
秋夜涼風起

江城疎雨余　風起行雲白　夜色万家涼　秋室千里碧　短檠稍可親　軽羅方攝襲　処々倚楼人　非関明月夕

二四、金刀比羅神社

謹按余家久有所秘蔵之一劍。霍造立一小社而欲安鎮之而数年不果、干時文化十癸酉歳有東行之役二月念五発舟。留泊於佐賀関数日適昼寝夢一老翁翁告曰子今祗役東武我贈子以崇徳二字寛頓首拝受而謝恩忽刻肺腑寤則益感激切葵心矣夫崇徳修匿弁惑此三教者造次不可廢也寛雖駑訥事此語日久矣況今於有夢託哉。雖然空言無実故建一社以襄所蔵之一劍為神主三月十日尊祀之而永仰神夢之威徳而已伏以□人皇七十五代帝垂跡干讃州廟今猶在矣世人以金刀羅大権現配称之神威日新而霊験如影響是以万国無不仰其徳焉蓋寛昔日所夢則帝謚也故今欲従衆称而以神神威也冀伝諸不朽使子孫無不典之儀也

時文化十二乙亥十月　　奥井寛謹誌

二五、奥井春耕碑銘

先生姓奥井諱寛字子柔家世業医年八歳喪父独与母氏居母氏貞正克先生也常訓以天祖考先生年十有二年荻先生者海内大家門人家遊者数百而先生為之冠先生年二十六業成帰已帰大会賓客上母氏之寿賦蓼莪報積年之辛艱先生才英邁学通外内医兼古今又善為瘍医其視疾窺之之一方転死而為生暗聾膝躄得全者許多由是名是自茂家　月殷有命増秩紹其家業恩礼尤縟焉嘗曰良医者医国我豈敢哉庶仮貸諸貧民憐恤孤寡以得冒成徳之称則足也於是乎散家資分賞賜浹振救人民先是先卜地将起別業北地負山俯原林木蓊鬱田畦昂低自多隠倫之奇趣因以為園命曰延陸暇予期遊放酌酒与里民戯困謡曰維是園林兮与子偕謡兮里民　将喜迎先生之　初先生生夢有人授崇徳二字寤語人曰夫崇徳者誠敬所以　聞以施政事則恩加四海沢及後世況修一身且為保元　上皇謚号不敢欣載其衣哉従是務徳弥厚矣為施益博矣又更建崇徳祠歳時亭祀為閭里之鎮今文政癸未五月乙未遘疾率年六十有四門人如喪考妣都鄙痛惜已殯歛丙申葬之嶺雲之管次先生妻高瀬氏而生一女養曰出侯臣滝氏次子為義子以女配之先生自在官前後加　七口至二十口家政画一医方明弁嗣子春暢守而無失一従其儀法官嘉之食旧食以奉其後可謂奕世不殞其業者也尾子恕者先生之親明也告予曰先生已歿葬嶺雲傘岡山之民追慕其徳乞祀諸其居里嗣子感歎乃別封塚充欺意兮欲建碑鴻其慶敢請銘之予曰夫銘者盛徳之任予也非其人子恕不聴乃鏤之誌銘曰

医之為業　其術則仁　周急是務　沢及　隣　岡山之陽　鬱々松蒲
宮有百畝　遺愛所存　維碑維銘　以表千春　民之慕徳　永薦蘋蘩

文政乙酉五月　　豊水閔乞成識

横田忠敏書之

二六、歌　人

佐伯の歌人として知られる者に六代高慶、甲斐英貞、高謙の夫人宗定子、稿迫春鞆、柴田守典の五人がある。

甲斐英貞は佐伯藩の従士で松廼舎鶴寸と号し、書及び和歌を良くし嘗て大坂藩邸に勤めていた時、天保十一年十一月中納言外山光実卿等と会して山と題して詠じた時英貞は、

くらきやみ　くもかゆきかととわぬまに　むめとこたえてにほうはるかぜ

と詠み、中納言は歎賞して禁廷に奉つたと云う。

十二代高謙の夫人宗定子は書、生花を善くし、最も和歌に秀でていた。嘗て江戸邸に在つた時警鐘に高謙と共に高楼に登つて見ると、火事は間近く焔や煙が楼に襲つて来た。高謙は夫人を顧みてこの様な騒ぎの中でも和歌が詠めるかと質すと夫人は即座に次の歌を詠んだ。

よこさまにもゆるはるひもきえぬべし　たえなるのりのはちすばのつゆ

五所明神の神官橋迫春鞆は博く国典に通じ、最も和歌を善くし、後進の業を受ける者が甚だ多かつた、遺集が家に伝えられている。

幕末の頃若宮八幡の神官柴田守典も和歌を善くした。

二七、春鞆の歌

私　訓

ゆるく咲く花風ぞげに憐れなる弥生の頃の夕暮の空

晩　夏

夏もやゝ竹の簀子のうたゝねに覚ゆるばかり秋は近づく

初　冬

冬の来るこやしるしなる朝日かいさす里あれば時雨降る里

寒　樹

そめかねて時雨もよわる椎柴を忘ひて寒くも吹く風かな

述所思

よはな竹静けき窓の文机に寄りて養ふ大和真心

幾会席即詠

別れいて筑紫がたより伊勢の海思ふ距ては浪の行衛か

還　暦

今年より六十をふたび行き還り同じ暦を君は読むらん

蒲江落雁

秋毎に落来る雁は屋形島名を頼みにそ宿るなるらん

二八、俳　人

俳人には小右衛門と薮光重が有名であつた。小右衛門は船頭町の商人で俳句をよくし、江左場滑京と号して寛政、享保の時代多くの弟子に俳句を教え、遺集があつたと云う。

日見格薮光重は日菊菴魯僊と号し俳句を善くし、多くの弟子を有していた。嘗て三光院に客と会して雪見をした時魯僊は先づ、

ゆきにめのやすめところもなかりけり

と詠むと其の席に居た中島子玉は雪の趣は既に尽きた、我又何をか云わんと感歎して遂に筆をとらなかつたと云う。

二九、長瀬原の碑

文政五年正月堅田村大庄屋芦苅惟繁、その子惟延の建てた長瀬原の碑は、天正六年耳川の戦に島津家久が大友の戦死者の亡霊を弔う為に宗麟原供養碑を建て、又天正十四年佐伯惟定が島津の軍勢を堅田の野に敗り、その死体を集めて普坂三塚を建てたのと、同様に敵を愛する心の現れである。碑文は次の通りで裏面には天徳寺沙門桓仙、江国寺桑門佐仁宝の碑文がある。

夏草や兵どもが夢の跡とは古戦場をいたむ翁の滑稽なり、今はむかし天正のとしの末にやありけん、友島両家権をあらそひ薩隅の者豊の府扶翼たる大神惟定大人妙策をもてふた国の軍を破り、そこばくの将卒此の原の露と消へぬるを、静かならぬ世のさまにて屍おさむべき人もあらざれば無貴無賤捨骨とはなりにけらし、夫より星移りものかわりぬれど、其激恨いまにさりがたきなり。空くもり雨くらき夜は霊火所々にもへ怪しうことなる声ほのきこへて更におちこち人の魂を寒からしむ。爰に郷長芦刈某これを憐み、大乗経王をかき写し、多くの比丘をくやふし幽鬼長く、修羅の苦海を出で、頓に妙法の台に至らんことを、いとねむころにものし玉ふ。かのわらべの石を積みしすら仏縁に近づくと聞く豈此の作善のいさをしをや。アヽ。

古城山下頑民佐藤掬水筆を鯰越の細流にそそぐ

三〇、佐伯茶飲話序

降りみ降らずみ五月雨の。いく日ふる日の徒然に。隠居同志の集りて。虚か実かしら菊の。聞くにつけても馨はしく。天正や文禄や、高麗征伐のその比より。当家々中の侍が、武功のはなしをとりあつめ、聞しとふりを記るし置く、さてうそならば虚ばなし、我さへ知らぬ伝へ聞き、茶飲ばなしの余談ぞと、棄させ玉ひて文えなし、まことにてもあるならば、きつと覚へていその上、ふりにし世にはしかゞ〳〵の、事もありきと末の世まで、口碑に残して置きぬべし、佐伯の里の物識が、語り伝へし事柄の、むかしの跡のなつかしく、茶のみの席の興なれば、茶のみばなしと題したり、かならずかならずかりそめの、他言他

見はつゝしまれよ。

三一、温故知新録序

文化六年二月家老関谷長熙はその著書温故知新録二十巻を藩に献じた、其の序文に、

予とし頃心ざし侍る、いにしへいまの、おほやけわたくしの日記が中に、よしあしごとのくさ〴〵をなん、松の葉の千世もつきせず、ふるきをたづね、あたらしきをしる、たよりともなれかしと、かきあつめ侍りけるに、やや三十巻あまりになれりければ、温故知新録となつけつゝ、文化むつのとし、きさらぎのはじめ、公に奉り侍ると、

末とをくおもひをく世はみづくさの　あとこそつきぬしるしならまし

又漢文にて次の如く記している。

夫政教正法則兼聴而時稿之、以欲復古矣是蒙宰之事也雖然積日累年之後恐署冊多端而見者混惑且当罹於天災展転不可知譬之猶人滅燭而曰女暗中模捽故推類接与謹志之大抵皆知其所足以稽矣庶幾後世襲取此言而以為使照燭則此又臣之本懐長存于不朽耳因名温故知新録、云爾和歌曰須恵登布久遠茂此於久世和美津玖幾農安登古曽津起奴志留誌奈良脉志

三二、続温故知新録序

文政三年五月関谷長熙は其の著す所の続温故知新録四十五巻を献じ前に献じたものと併せて六十五巻となつた、寛供公は之を嘉して次の序を書いた。

享和辛酉余謹継先公之緒業、而法律全頼旧典、然間以不能詳明、余是憾矣、　因恐後之視今猶今之視古乎、　使臣長熙編次蠹簡、芟除冗長、別為一書、書成、四十有五巻、題曰温故知新録、一目瞭然、今古歴尽、昔日残蛙、令為完璧矣、功不亦偉乎、因賦七律一篇而褒其苦心言、詩曰

補政當堪覆座右　多年辛苦感成功
人情移類風雲彩　世態繁同割棘叢
与細分条論愚眷　丁寧解事発明聰
閲来深覚心胸朗　温故知新数部中

三三、秋月橘門の詩

栂牟礼城懐古

臨レ風長嘯恨依々　千古英雄一夢非
荒墓棲狐埋三乱艸一　残碑戴鵲立二斜陣一
或伝寃血夜深後　凝作二寒燐一雨裡飛
壮士何堪二慷慨切一　野花折取条レ墳帰

明治元年徴せられて参河県知事となりたる時

微行楢恐為人妨　更自街西迂路回
認得長髯白如雪　伝呼知県相公来

望妙義山

向山峇大箭。　弓影月齊々。　飛鏑空中響
洞然横貫竅。　始車輪大山。　比是南天□
此事本難信。　古昔或有寓。　安得斯伎倆
一発砕万足船

三四、佐伯岡の谷の碑

明治十年西南戦争の時官軍百四十余名が佐伯地方の戦に戦死し岡の谷に埋葬され墓石が建てられたが、別に碑を建て戦死者の功を永く伝える事となつた、次は秋月新太郎の撰である碑文である。

明治十年戦役、賊連敗於肥後之埜、窘蹙取路于日向、出豊後南境、官兵八隊撃、其用兵之地、概皆険峰深谷、而大質老樹相間、以故攻守進退不能如意也、八隊士卒戦死者百四十余人、賊遂失其執、以至於潜滅、嗟呼死者之功、永與山川不朽矣、其隊姓名則墓碣所記、頃某々相謀就其理骨処佐伯村岡谷建碑表之、徴余銘以旧辭於佐伯、誼不可辞也、銘曰、

豊日之界　賊徒猖獗　官軍防戦　雷撃電掣　敵玉之愾　争踵鮮血
視死如帰　何其壮烈　洵美岡谷　爰埋忠骨　生気千載　凛乎不滅

明治十九年五月　　正六位勲四等　秋月新太郎撰　併書

三五、明治初年の学者

明治維新当時の佐伯藩の学者として楠文蔚、鳴鶴、矢野龍渓、秋月天敬、松岡蒙等を挙げる事が出来る、次は其等の人の詩である。

蒲江青龍秋月　　楠文蔚

松影落幽溪。月光照深洞。欲探頷下珠。恐駭驪龍

舟過鬼門関　　鳴鶴

山光映水月輪弧。景色依稀赤壁図。如此勝游猶有憾。舟中為少個髯蘇。

無題　　矢野龍渓

憂世嘗期天下先。縱横又願筆如椽。竹帛功名本塵土。誤堕人間五十年。

秋月　天敬（新太郎）

轟山暮雪

松岡　蒙

黯澹凍雲深。寒鴉欲結舌。天晴不見山。唯見万尋雪。

蒲江鰐州夕照

海濶天低天。風鳴山欲揺。斜陽忽門滅。巨鰐浪間跳。

三六、城山還原の碑

城山は慶長六年から十一代二百六十余年の間毛利氏の居城であつたが、明治初年藩籍奉還により城山は国有となつた。十二代高範は城山の一朝にして官有となつた事を惜しみ、償還を政府に請い、明治三十四年再び毛利氏の有に帰した。高範は其旨を後世に残すべく三の丸に還原の碑を建てた、碑文には次の如く書いてある。

慶長六年、我祖養賢公就レ封、相二取於佐伯之邑一、築二城於鶴谷之山一、山拔レ海約百八十尺、広袤凡肆拾陸町、周囲壱里強、前臨二市街一、後負二白潟一、東控二瀧山一、南則久部長瀬一帯平野、屹為二邑巨鎮一矣、公下世後、伝二十一代二百六十余年一、至二温良公一、明治初年奉二還藩籍一山為二官有一及二予継レ統以為、此山址所レ在二墳墓一、所倚一朝而失レ湮滅二耳、乃祖廿二年九月、具レ状於請二償還一、至二卅四年二月一、始有二允准之命一、嗚呼城山一失而再得レ之、列祖在天之霊、其喜可レ知也、而余報本反始之念亦是乎達矣、因叙二其梗概一以念二来茲一銘云、

鶴谷之山　我祖所闢　鬱乎蒼翠　有巍有奕　子々孫々　宣永保有　茲建豐　与山不朽

明治四拾四年九月　　従三位子爵　毛利高範　撰並書

三七、佐伯藩の研究資料

毛利高政が佐伯の荘に封ぜられた慶長六年から明治維新になる迄約三百年間の佐伯の歴史を知る記録に、佐伯茶飲話、佐伯古老物語、温故知新録、続温故知新録、鶴藩略史、毛利家系譜、豊後佐伯毛利高謙家譜、古御画写、寛永、正徳佐伯御手日記、享保、元文、寛保、延享、寛延、宝暦、明和、佐伯御定書、諸役人神文前書写、元禄、宝永、正徳、享保日記、享保佐伯御手日記、寛政日記、諸雑記、宝永、正徳、享保日記、明和日記、天明日記、文化日記、文化御定書、享保、元文、寛保、延享日記、安永日記、享和日記、諸旧記等があり、参考となるものに佐伯叢誌、佐伯志、新佐伯等がある。

佐伯茶飲話、佐伯古老物語は共に野史であつて藩政時代これを書写して蔵していても、決して人に見せず、潜かに或る一部の者に読まれていたもので、万一これを所有している事が判れば如何なる処罰に遇うかも知れなかつたものであつた。温故知新録は毛利家の所謂家老日記と某の私記とを資料として著述した所謂正史で、鶴藩略史は平山小文治が明治の初期漢文で最も正確に記述した記録で佐伯藩の事を調べるには最も要を得た書である。上記の毛利家系譜以下諸日記は祐筆の達筆に、現代人の一寸読み得る記録ではなく、又其の膨大な記録に唯驚歎の声を発するに止まるであろう。佐伯志、新佐伯、佐伯叢誌等は断片的な資料を挙げているに過ぎない。

三八、鶴藩略史発行始末

昭和廿二年の秋偶々柴田南萃堂の書棚から漢文で書かれた一冊の写本を見出した、表紙には鶴谷略史とあり本文には鶴藩略史と記してあり著者も序文も書いてなかつた。この写本の記事は正確で得難い史料であつた為に、其の消失を恐れて許を得て発行する事になつた。然し其は漢文で現代人には困るであろうとの説も多く、遂に読み流しの形で某の校閲の後発行した。私の病院の事務員で私の秘書役を久しく務めていた平山笑子君はこの原稿を浄書しながら、常にこの著書は誰でせう随分正確に詳しく書いているがと感歎していた。発行後大分の某博士から君の出版したのは上巻でそれには下巻があり、著書は平山小文治で中根祚風の校閲となつているがと云つて来た。大分にある写本を見ると下巻があり著書も記してあつた。この鶴藩略史が

どうして大分にあり佐伯になかつたかを調べて見ると、平山老が筐底深く蔵した儘没し、昭和になつて大分にいた某氏に貸した儘になつていた為であつた。勿論私の出版したのは初代高政から七代高丘迄の上巻で、下巻を出して呉れるように希望する者もあるが、然し原文の儘では勿論、漢文読み流しの形でも六ケ敷、異訳すれば原文に忠実でない事になり訳者の悩みはそこにある。鶴藩略史の原稿の清書をしながら感歎久うした平山笑子君は、其の著者平山小文治老の孫であつた事は云う迄もないそこには何か因縁があつたとも考えられる。

（津久見市青江、医学博士）